

仏教福祉活動について

水谷 幸正

(佛敎大学学長)

はじめに

恒川武敏先生は、仏教者として、そしてまた社会福祉行政者として、仏教社会福祉のありようを理論的にも実践的にも追求しておられた。わたくしも、先生の驥尾に付して、わたくしなりに、これからの仏教のありかたを模索しながら、社会福祉に多少の関心を抱きつつ、『佛敎福祉』その他に拙論を発表したことがある。

先生が急逝なさったころ、たまたまわたくしは、大法輪閣から『大法輪』七月号に「仏教と福祉活動」という題目のもとに、釈尊以来の仏教社会福祉活動の大まかな概要と現代的な意義について書くよう依頼されていた。枚数に制限があっ

たので、意のあるところを充分に書きつくすことはできなかったが、平素考えていたことの一端を述べることができた。

いま、恒川先生の追悼号が編集されるにあたって、なにかオリジナルなものを発表せねばならないと念願していたのであるが、雑用に追われるまま、その時間を得ることができなかった。そこで、大法輪閣の了解を得て、再び掲載することにした。『大法輪』を愛読していない社会福祉事業者も多くあると思うので、関係各位に一読たまわり、ご叱正いただければ幸甚である。

福祉とは

いまさらあらためて書くまでもなく、「社会福祉」という

用語が一般化したのは戦後のことであり、とくに昭和二十六年に「社会福祉事業法」が制定されてからのことである。いまここでいう「福祉活動」の「福祉」とは社会福祉を意味することはいうまでもないが、ただたんに「福祉」と言った場合は広義の内容を含むことになるから、仏教の活動はすべて福祉活動であるということになってしまつて、論述の意図がばやけてしまう。したがつて、少し理屈ばくくなって申しわけないが、はじめに、用語について若干整理しておきたいと思う。

福祉という用語が、いつごろからどのような内容で日本語として定着してきたのか、わたくしはつまびらかでない。横文字の翻訳としての術語がはばをきかせている現代の学問用語の中において（いまの社会福祉事業は、アメリカの社会福祉の影響を受けているので、この学界や現場においても横文字の概念が多くみられる）、福祉という言葉の内容についても必ずしも共通の理解が与えられているわけではない。このことについての議論は差し控えるが、ただ一つ言いたいことは、もともと「福祉」と「幸福」は同義語であるにしても、いまではかなり意味あいが違つてきているということである。

「幸福」は人間の個人のありようを評価し、私は幸せである、と言うようにいわば主観的な価値観である場合が多い。

「福祉」は人間の生活環境の状態をさしており、公共の福祉とか人類の福祉などと言われているように、複数の人間関係つまり社会生活の価値観を意味する場合が多い。したがつてそれは客観的な評価である。社会福祉という用語も、このような意味あいのもとに用いられている。地域福祉、住民福祉、生活福祉などなど、いろいろな用語で社会福祉のありかが模索されているのも、福祉といえば、個人のことでなく、人間関係の調整を意味しているからであらう。したがつて、一言でいえば、福祉活動とはひとえに社会的実践なのである。

社会福祉事業と仏教

戦後、社会福祉が一定の方向を与えられるようになった歴史的背景として、慈善事業→社会事業→社会福祉事業という展開のあったことを無視することができない。あとで述べるように、日本における福祉活動は、古代社会から明治時代にいたるまでは慈善事業や救済活動が中心であり、数多く

の仏教者がその担い手であった。近代社会における社会問題対策として社会事業が成立したのは大正時代に入ってからである。戦時中に厚生事業という内容になったこともあったが、戦前はだいたい社会事業という名のもとに、いわば社会政策の一部を担当していた。よしあしはともかくとして、その社会事業の意味が慈善事業を受けついでいたことは自然のなりゆきであって、仏教者や仏教教団の活躍をそこに見ることが出来る。

制度としていま行なわれている社会福祉事業は、實質的には戦前の社会事業を受けついでいるが（社会福祉事業を略して社会事業という場合も多い）、社会福祉といった場合は、社会福祉事業のみではなく、社会政策や社会保障も含めて社会問題対策の全部を意味している（もちろん、社会福祉事業を社会福祉と略称する場合もある）。つまり、人間の社会生活全般の安定と進展をはかるものが社会福祉なのであり、そのための実践が社会事業であり福祉活動なのである。だからこそ、その中にさきに述べた地域福祉や生活福祉などが含まれねばならないのである。

右に述べたことは、ごく常識的なことであるが、仏教と福

祉活動を問題とするにあたっては、この常識的なことをいちおう踏まえておかないと混乱を生ずるおそれがある。何故ならば、現在の福祉活動の視点は、おおむね社会福祉事業に限定されており、しかもその事業は制度論あるいは技術論的立場からの視野が主流であって、社会科学の認識のもとにおける理論化が実践の背景にあり、宗教としての仏教とは別のもののような方向になりつつあるかのようなからである。

たとえば、社会事業の本質は資本主義社会体制の構造的欠陥に対する施策として実施されるものであって、その実践は国家（社会）の義務であり、責任であるとともに、その対象者は当然の権利として受けたらよい、というのがいまの社会福祉の思想的根拠になっている。なるほど、いわば公的扶助という面ではそれでよいかもしれないが、福祉活動という面からいうならば、その議論は部分的な原則であり考えかたであると言わざるをえない。もちろん、現実の社会構造に対する社会科学の認識や本質的把握をぬきにして、社会事業を語ることはできないにしても、社会事業なるものがおしなべてやはり社会的弱者を対象とし、救貧事業や障害者保護事業に重点がおかれている現状をふまえるならば、宗教的理念

(仏教精神)を支えとする社会活動としての社会事業であつてこそ稔り豊かな実践となりうるのである。

だからといって、仏教者の行なう福祉活動が、かつての慈善救済事業のように、上から下へ恵み与えるという態のものであったり、また教団の布教、伝道、教化の一環として行なうという姿勢のみであつてよい、というわけではない。福祉活動をめざす仏教者は、現代の人間関係科学ないしは社会科学によって解明されている学問的成果を学習し吸収することに積極的にとりくまねばならない。このことは、仏教の現代化、社会化という課題からいっても必要欠くべからざることである。

さりとてやはり、たんに社会科学だけで人生や社会の諸現象を説明することはできない。たとえば、国家的エゴイズムをはじめとして個人的なエゴイズムにいたるさまざまな利己的欲望によって生ずる社会問題や、老人とか病人の問題などは、人間そのものの苦悩に関わることであつて、科学の及ぶところではない。人生そのものを主体的に問題とし、人間の苦悩を解決しようとするのが実は仏教なのである。その苦悩を自ら克服するのが解脱であり、社会的(他者との関係)に

解決するのが救済である。類型化して言うならば、解脱は自利の智慧のはたらきであり、救済は利他の慈悲のはたらきである、ということになる。解脱と救済、智慧と慈悲は表裏一体であるから、あえて分けるべきではないが、社会的実践という観点からするならば、慈悲の利他行が福祉活動ということになる。

慈悲の利他行は菩薩道といわれ、それにまつわる実践項目として、六波羅蜜、四摂法、あるいは福田思想や淨仏国土成就衆生、などがあげられるように、仏教の福祉活動の徳目にはこと欠かない。したがって、仏教的な日本の風土に適した、これからの社会福祉を支えるものとして仏教の福祉活動を見直さねばなるまい。このことについては、あとで今後の課題、展望として述べることにする。

それでここではつづいて、釈尊をはじめ過去の仏教者の福祉活動のあり方について少しみてゆくことにしよう。

釈尊の福祉精神

釈尊の出家求道のありかたに象徴されているように、仏教は厭世、遁世の出家主義であるとふつう見なされている。釈

尊にかぎらず、小乗仏教は概して出世間的であるし、大乘仏教でも（たとえば日本仏教をみて）、禪宗は現世から隠遁して修行する傾向があったし、浄土教は厭離穢土欣求淨土（おんりえどごんぐじよと）というように、一見したところ、大勢としては社会的実践に乏しい宗教であるといえる。キリスト教が現実社会に立ち向かっての神の御心にそった愛の実践（社会的実践、倫理の実践）を目標とし、社会正義の実現を使命としているのに比べて、特徴的な対照を示している、といわれる。

しかし、仏教とても、決して社会からの逃避を目ざすものでもなければ、社会に対して無関心であるわけではない。現世の否定（無常観）の上に立って、さらに一転して積極的な現世への働きかけを目ざすところに、仏教の社会的実践が活きているのである。釈尊が成道後入滅までの四十五年間にわたって、教化活動をなさったという伝記をみて、そのことが明らかである。

釈尊の行実については、確かな資料がなにも残されていないので、伝記や経論に書き記（しる）していることから推測するよりいたしかたない。個別的な事例や行動については史実であるかどうか不明なので、一々とりあげないが、それらを通じて

釈尊の教化方法や福祉精神をかいまみることにしよう。

まず第一にあげねばならないことは、対機説法ということである。応病与薬（おうびよやく）、病気に応じて薬を与える、ということと同様に、その人その人の素質や能力に応じて法を説く、ということが釈尊の教化方法であった。八万四千の法門なるものができてきた所以（ゆえん）でもある。対象者の境遇に適応したきめこまかい配慮のもとに、その人に対する最もふさわしい活動をするということが福祉活動の基本でなければならぬ。福祉活動は総論ではない。各論なのだ。相手を自分のレベルに近づけ抽象論をふりまわすのではなく、相手のレベルに自分を近づけて具体的な方策を講ずべきことが社会的実践の要諦であることを、釈尊は伝道教化の実践を通じて示されているのである。

つぎに、生命尊重ということである。慈悲の利他行は当然この生命尊重となって現われてくるのであり、釈尊は人間に限らず動物にいたるまで、すべて生きとし生ける者の生命を尊重することを説いている。仏教徒たるものが最小限守るべきものとして五戒があるが、その第一が不殺生戒であることは周知のところである。「いのちを大切に」ということこそ

福祉活動の原点である。生活を安定せしめ心を安んずるといふ福祉の目標は結局のところ生命を守るということに落着く。

生命尊重ということとは人間尊重ということにもなる。なぜ人間は尊重されねばならないのか。その根拠を明確に説いているのが、釈尊からはじまる仏教思想なのである。端的に言えば「一切衆生悉有仏性^{しつぽつしやう}」ということである。すべての人びとはみなみ仏の「いのち」を頂いているのである。だから、みなひとしく尊重されねばならない。と同時にまた、同じ「いのち」を持っているのだから、あなたが悲しい時はわたくしも悲しいのであり、あなたの痛みはわたしにとっても痛みである、ということになる。同悲、同苦の共感の世界に生きているという自他平等の間がらを人間という。仏教の福祉活動の理念はこの人間観から発想されていることをしっかりとっておさえておいてほしい。

三番目に、四姓平等ということである。周知のように、階級差別観念のきびしいインド社会において、釈尊はすべての人間が平等であることを宣告し主張した。生れによりて賤民なのではない、生れによりてバラモンなのではない、行ないによって賤民となり、行ないによってバラモンとなる、とい

う有名な言葉によってよく知られているように、階級による差別を否定し、基本的人権を尊重した。すべての人びとの人格を平等に重んじるということこそ、これまた福祉活動の根本理念である。

右に述べた基本的精神が現代にいたるまで仏教的活動の源泉となっている。

仏教慈善事業のあらまし

釈尊以後、多くの仏教徒たちが、その時代その社会に応じた福祉活動を実践していったことであろう。そのことは経典や論書に説かれているところからも推察することができるが、ここではそれを詳述する余裕がない。ただ有名な事柄として、かのアショーカ王が法（仏教精神）による政治を行なったことをあげることができる。国王は国民のおかげで生活の資材を得ているのであるから、政治は国民への報恩行であるとともに、親が子に対するような慈愛の精神をもって国民の福祉を願わずにはおれない、というのがアショーカ王の政治姿勢であった。病院建設、井戸掘削、菓草栽培、道路植樹、旅行者のための休息所や緊急時の物資貯蔵庫の建設など、数多く

のいわゆる慈善事業を行なった、と伝えられている。

紀元前後から大乘仏教運動の展開にともなつて、利他の慈悲行がなおいっそう徹底されてくるのであり、その具体像が菩薩であつた。有名な捨身飼虎^{しゃんしんこ}や雪山童子^{せっせんどうじ}の物語などをはじめとして、菩薩の利他行が本生譚として流行し、この菩薩精神が大乘仏教展開の原動力となつた。一切衆生を救おうという菩薩の慈悲利他の実践を社会的実践とみるならば、すぐれた福祉活動であることはいうまでもない。

大乘仏教は中国に伝播し、中国社会においても、これまた有名無名の多くの仏教徒が菩薩精神による福祉活動を実践しており、とくに唐代の悲田養病坊や無尽藏院、僧祇戸^{そうぎこ}の制度、無遮大会^{むしやだえ}など仏教慈善活動として日本に影響を及ぼしたものが多く、そのことは割愛して、日本仏教の福祉活動の流れについて若干ふれておきたい。

日本の仏教は聖徳太子からはじまるといつてもよいのであるが、その太子の政治活動はアショカ王と同じく仏教精神にもとづくものであつた。篤敬三宝を説く十七条憲法にそのことが象徴的にあらわれている。当時の古代社会において、農業や産業の開発、あるいは学芸の進展などに力を注がれた

ことも広い意味での福祉活動であろうが、慈善救済事業としては、四天王寺に設けた四箇院、すなわち敬田院（求道伝道の施設）、悲田院（貧窮孤独者の救済施設）、施薬院（薬草を殖産し施与する施設）、療病院（無縁の病人を収容する施設）が有名である。このことが史実かどうかの疑いもあるが、以後の仏教者の慈善事業の範となっていることはまちがいない。

奈良朝時代以降にも多くの仏教者によつて救貧、医療、土木（架橋、築堤、道路、植樹など）などの諸事業が行なわれている。とくに有名なのは、かの行基であり、菩薩と尊称されるほど福祉活動の万般にわたつてその生涯を捧げている。平安仏教の二大開創者である最澄と空海もその影響を受けているが、とくに鎌倉仏教の重源^{じゅうげん}や叡尊^{えいそん}や忍性^{にんじやう}に多大の影響を与えている。なかでも忍性の活動は行基にまさるとも劣らないほど多方面にわたっている。

鎌倉新仏教の開創者である法然、栄西、道元、親鸞、日蓮、一遍などもまた社会的活動家であつた。末法時代という現実に直面して、五濁惡世という社会的不安から大衆を救ふことが共通した目標であつたから、精神的なものに比重が偏るこ

とがあつたにしても、その活躍は評価されねばならない。教義はそれぞれ異なるにしても、みなひとしく、社会の底辺に生きる人びとの救いを願う菩薩行者であつた。

幕藩体制の封建社会下における仏教の衰退についてよく論ぜられている。なるほど死者追善回向を主たる仕事とするような傾向が強くなつていったことも事実であろうが、しかし、それぞれの地域社会において住民の福祉を願いつつ、能力に応じて精一杯努力を続けた無名の僧侶のあつたことも忘れてはなるまい。たとえそれが教化活動とみなされるにしても、その時代に即応したいわば慈善事業であり、福祉活動に価するものであつた。

明治時代に入つて近代社会が成立するが、政府が行なう施策は慈善事業的なものが多かった。仏教教団あるいは仏教徒は、これに協力するかたちか、もしくは独自の民間活動として救済事業を行なつていった。とくに明治時代後半にいたつて仏教教団の活動は活発になり、組織的に行なわれるようになった。その内容は、前近代的な感化救済事業が中心であつたとしても、組織的な力を發揮するようになったところに、仏教的福祉活動の前進がみられる。

仏教社会事業の現状

さきにも述べたように、福祉活動が社会事業として成立するのは大正時代中期になってからである。救済事業的なありかたから、社会問題としての社会連帯的事业の性格づけがなされてくる。日本における近代的社会事業の成立をこの時期におくのがふつうである。仏教教団においても、社会事業従事者を養成したり、あるいは大学の研究室や研究所において学問的研究を行なうようになった。キリスト教の社会事業や、社会主義運動や、社会科学思想などからの影響も多分に受けているようであるが、その中味はやはり仏教的慈善救済事業を払拭したものではなかった。

この時期以後、戦前までの社会事業は公私一体のかたちをとるものが多く、施設も数多く設けられていった。また、矢吹慶輝、長谷川良信、海野幸徳をはじめとして、多くの仏教者としての社会事業思想家を輩出している。この時代は仏教社会事業の成立期といつてよいであろう。

敗戦という混乱した社会から民主主義国家、さらには高度経済成長という、めまぐるしい転換と進展をみせている戦後

三十七年間の日本の社会においては、前述したように、戦前の社会事業を受けつぐとともに、アメリカの社会福祉を模しつつ、現代社会に対応しきれていない、というのが今の社会福祉の現状であろうか。もちろん、戦前に比べて格段と前進した面がかなり認められる。たとえば、国家の公的責任においてすめられる社会保障が大きな役割を持つようになつてきたこと、したがって社会福祉に関する諸立法が整備され行政組織が充実してきたこと、対象が要保護者から全国民へと拡大しつつあること、などである。ところが、その結果、社会福祉事業は公的施策であるから、民間の私的活動は公的活動を鈍らせる、という考えかたがでてくるようになった。昭和四十年ごろまではとくにその傾向が強かった。したがって戦後二十年間ほど、仏教者が地道に行なつた福祉活動は補助的なものとみなされることが多く、ついには仏教社会事業は片隅に追いやられるのではないか、という当事者の不安があつたことも否定できない。

昭和四十年以後になると、社会福祉事業の充実のために、やはり民間団体や地域住民の活動がきわめて重要な役割を持つものであることが改めて認識され高く評価されるよ

うになつた。いいかえれば、公的社会福祉事業に限界のあることがはっきりしてきたことである。それがかりに慈善救済事業であり、教化事業であつたとしても、民間活動として永い歴史をもつ仏教の福祉活動が、いまの社会福祉事業に大きく貢献しているのであり、今後も期待されていることはまちがいない。

現在行なわれている仏教者の社会福祉事業の内容については、別に掲げる施設一覧、および「私と福祉活動」と題して掲載されている生々しい体験や貴重な意見を読むことによつて、理解していただきたいと思う。それでは、仏教と福祉活動についての課題や展望について、少しふれることによって結論にかえることにしたい。

仏教福祉活動の課題と展望

編集部より与えられたテーマは、仏教と福祉活動、であつたが、これからの仏教福祉は、仏教の福祉活動、さらにいえば、仏教即福祉活動、とならねばならないと思う。

仏教と福祉、といった場合は、両者を併列的にとりあげて、その結びつきをはかるものにすぎないから、必ずしも有

機的な活動とはならない。

仏教の福祉、というのは、仏教を主体とし中心とする福祉活動であって、仏教精神から必然的にでてくる社会的実践である。

仏教即福祉、というのは、仏教の福祉をさらに一步すすめて、仏教のすべてが福祉活動であるということであって、社会福祉という内容においてこそ仏教の現代化、社会化がある、ということである。

仏教はたんなる哲学でもなければ思想にとどまるものでなく、宗教である、ということは、すぐれた実践をめざすものであることを示している。実践のかたちとしては、別に「教育」の問題をあげねばならない。いまここで仏教即福祉といったのは、教育も含めた福祉活動を意味していったのであるが、福祉と教育を別々に考えるならば、さらに仏教即教育ということでつけ加えねばなるまい。

私は思う。仏道の実践は結局のところ、人間教育と社会福祉であり、それが教化であり伝道なのである（仏教／人間教育／社会福祉／教化）、二十一世紀をめざしての仏教の実践理論をここに求めるべきである、と。

いまや、福祉国家といわれているように、福祉は人類の指向する共通目標となっている。それにもかかわらず、社会福祉の内容は概念的にも一定しておらず、なお混沌としているといっても言いすぎではない。学問的にいっても社会福祉学はこれからの学問である。まして、二千五百年の伝統を有する幅ひろく奥行の深い仏教による「仏教社会福祉」に統一的な理論体系を与えるということになると前途洋々たるものがある。十五年ほど前に日本仏教社会福祉学会が組織され、理論的研究が進められていることはよろこばしい（ちなみに、仏教大学は仏教社会事業研究所を設置しており、『仏教福祉』を毎年刊行している）。仏教社会福祉に関する著書や研究論文は未だ微々たるものであるとはいえ、着々と成果を挙げつつあるといつてよい。

わたくしの知り合いに尊敬する二人の医者がいる。大阪社会事業大学教授奈倉道隆先生と京都堀川病院副院長早川一光先生である。お二人とも老人医療を通じて社会福祉を実践なさっている立派な先生である。奈倉先生は僧侶の資格を持つ仏教者であり、老年学の造詣が深く、仏教の現代化は仏教精神による社会福祉であり、仏道による医学であることを教え

ておられる。早川先生は『わらじ医者京日記』の名著でも知られているように、とくに老人を対象とした病気を治す文字どおりまち・医者として有名である。奈倉先生は仏を信ずる医者であり、早川先生は神も仏も信じないという。

ところが、両先生が共通して主張なさっていることは、老人にとって最も大事なことは生かされているという感謝の気もちを持つことだ、ということである。老人の健康、老人の活力は感謝の生活からでてくるというのである。

仏教とはむずかしい理屈をこねることばかりではない。この感謝の生活ということが仏教なのである。仏を信ずる信じないにこだわることもない。生かされているという喜びと感謝の気もちのあるところに仏教が活きている。ここに老人福祉の目標がある。結局は仏教福祉に収まることを、尊敬する二人の先生のありよう（思想と行動）から学ぶことができることを申しそえた次第。

最近の意識調査によれば、心の安らぎを感じるのは、家族との団だんご樂が五四％、趣味が一五％、宗教がわずか三％であり、つぎに、どんな人から影響を受けたかというところ、両親が四六％、友人一一％、先生八％、宗教家はわずか六％にすぎ

ず、無宗教者は六二％（二十代は八〇％）と実に多い。仏教がこれからの日本人の心のよりどころとなり、その存在意義があるとするならば、そのためにいかにすべきか、ということが仏教の今後の課題となる。仏教教団や仏教者にとつて、なさねばならないことがあまりに多い。怠惰は許されない。多くの人びとに見直される仏教となるためには、人間をつくる教育とそして積極的な福祉活動がもっとも有効な方法である。さらにいえば、福祉活動こそ、これからの仏教のあり方をきめることになる、といつてよい。

わたくし自身の自戒と自省をこめて、仏教者の社会的実践という求道精進をねがってやまない。